

分娩室管理よりみた過去3年間小児科入院新生児の分析

慈恵医大小児科

前川喜平・奥山真紀子

目 的

56年度は共同研究として香月が施行した周産期死亡7以下の施設に低い理由をたずねたアンケート結果をもとにして問題をまとめた。本年はNICUなど新生児の集中管理が呼ばれている現在、少数出産の大学病院の存在意義をみるため慈恵医大における過去3年間の小児科新生児室入院症例の検討をおこない、これをもとにして分娩室管理の在り方をまとめた。

対 象

昭和55～57年の間に慈恵医大小児科新生児室に入院した新生児182名で、外部よりの紹介入院は62名である。入院月齢は、生後0～7日：144名、8～28日：38名である。

原 因：(表1)

一般産院に比較して消化管奇型、先天性心疾患などの奇型47名(26%)と母親の疾病(糖尿病、甲状腺疾患、SLE、慢性腎炎、てんかん、精神分裂病など)38名(15.4%)が多いのが大学病院の特色である。後期に紹介されたものではCHDなどの奇型が17/38、感染症8/38が主な原因であった。小児科依頼の母親の疾患としては、糖尿病11、甲状腺疾患5、Hb抗原3、精神分裂病2、

てんかん2、慢性腎炎2、母親のアルコール飲酒1、SLE1、悪性腫瘍1。

死 亡：死亡率18/182(9.89%)

0～7日入院：15名、それ以後3名

先天性心疾患8(紹介4、本院4)

未熟児+IRDS6(紹介4、本院2)

食道閉鎖1(紹介)、多発奇型1(本院)、

Hydrops fetalis 1(本院)、脊髄被裂術後脊髄炎1(紹介)

CHD 8例、IRDS 6例が大多数を占めていた。奇型に関するものは外部よりの紹介と本学とで死亡数に差はみられなかったが、IRDSでは外部より紹介のものに死亡例が多くみられた。

結 語

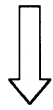
NICUなど新生児の集中管理が叫ばれているが、大学病院新生児室は外科の疾患、難治性奇型疾患、母親の疾患よりの新生児の管理に他科と関連して存在価値があるように考えられる。更に、以上の結果を今後の分娩室管理の在り方より考えると、これからの母子センター、NICUの在り方は転送システムの整備と共に大学病院と同程度のMedical Centerの敷地内に建設されることがすべての面で望ましいといえる。

表1

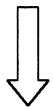
小児科新生児室入室疾患名

(昭和55～57年：182名)

低出生体重	44	先天性奇形	47
黄疸	15	(CHD 22)	
呼吸障害	13	(消化器 11)	
特発性嘔吐	10	(その他 14)	
感染症	9	母親の疾病	23
新生児メレナ	7	代謝・内分泌	3
新生児仮死	4	その他	3
新生児けいれん	4		



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

56年度は共同研究として香月が施行した周産期死亡7以下の施設に低い理由をたずねたアンケート結果をもとにして問題をまとめた。本年はNICUなど新生児の集中管理が呼ばれている現在,少数出産の大学病院の存在意義をみるため慈恵医大における過去3年間の小児科新生児室入院症例の検討をおこない,これをもとにして分娩室管理の在り方をまとめた。